王立プノンペン大学外国語学部日本語学科の日本語教育
―四年次授業の現況と課題を中心に―
A perspective on the 4th year undergraduate at Japenese Department of the Faculty of Foreign Languages, Royal University of Phnom Penh

オルン チャンポン
ORN Chanphorn

はじめに
一、カンボジアにおける日本語教育の歴史
二、王立プノンペン大学外国語学部日本語学科の概要
三、王立プノンペン大学日本語学科の科目概要
四、王立プノンペン大学外国語学部日本語学科四年次授業の現況と課題
むすび

はじめに

一九七〇年代のカンボジアでは、正式な教育が行われなくなっていた。一九七五年四月十七日、クメール・ルージュが首都プノンペンを占拠し、一九七六年五月十三日、民主カンプチアの首相に就任したポル・ポトの政権下で、カンボジアの山岳先住民族の自給自足の生活を理想とする極端な重農主義・農本主義の国家体制が敷かれた。この原始共産主義の実現のために、学校・病院・工場が閉鎖され、銀行や貨幣が廃止された。都市住民は農村に強制移住させられ、食糧増産に従事した。こうして、カンボジア全土の学校がすべて閉鎖され、教職員の多くが殺害されたのである。

一九七九年にポル・ポト政権は終焉を迎え、カンボジアの学校教育が再開された。しかし、内戦の爪痕は深く、今なお、全国のすべての学校の再開には至っていない。優れた人材が大量に殺害されたために、指導者も少ない。文献資料等もほとんど焼かれてしまった。教育の復活は、非常に困難である。ポル・ポト政権崩壊後、約四十五年を経過した今もなお、カンボジアは多くの教育問題を抱えている。

第一に、経済の問題である。子どもが教育を受ける権利は、普遍的人権といえよう。しかし、この権利は、すべてのカンボジア国民に享受されているわけではない。特に農村部では、教育を受ける機会のない子供たちも多い。貧しい農村部の親は、子どもたちが大きくなると、家族の収入を補うために働くことを当然のように考えてしまっている。そのため、早期に学校を退学せざるを得ない子どもも多く、基礎教育期の退学率も高い。これは、カンボジアの深刻な教育問題である。

第二に、教育をする側の人材と教材の問題である。カンボジアの学校教育は、日本と同様の六・三・三・四制である。しかし、日本のような教育体制が整っているわけではない。学習内容は、国語・書き方・作文・算数・歴史・理科等が中心であり、美術・音楽・体育の科目はほとんど行われていない。外国語教育は中学校から、英語かフランス語を選択する。[1]

授業の内容も、けっして深くはない。その理由は、ポル・ポト政権下で教育体制が崩壊し、指導する側の教員自身の知識があまり豊かではないからである。しかも、教員の給与は安く、教師という職業はあまり人気がない。また、指導に対する意欲が旺盛な教師は少ない。

教員や教室の数も不足しており、午前・午後の二部制授業が実施されている。不十分な学習時間を補うために、放課後、民間の学習塾に通ったり、同じ学校の教師が有料で学習指導をすることもある。

使用教材は教科書のみで、学年修了後、次の学年の生徒が再利用するために回収される。したがって、前年度の学習内容の復習をすることもできない。

第三に、家庭環境と親の意識の問題である。ポル・ポト政権下に育った多くの親は、文字が読めない。十分な教育を受けていないので、子どもに勉強を強いることはないので、子供には学習習慣が定着しづらい。

このようにカンボジアの教育問題は深刻である。しかし、教育こそが、カンボジアが抱える貧困問題を解決する重要な鍵となろう。カンボジアの大学進学率は、一般には0・7～1・0％程度である[2]。筆者が教鞭をとる王立プノンペン大学は、将来のカンボジアを支える人材を育成する国内最高の教育機関である。本稿では、日本ではあまり知られていないカンボジアの日本語教育を、王立プノンペン大学日本語学科に例をとって紹介するとともに、今後の課題とその改善の方法を探っていきたい。

一、カンボジアにおける日本語教育の歴史

カンボジアにおける日本語教育は、第二次世界大戦時の日本軍による指導が多少あったものの、本格的にスタートしたのは、一九六〇年代になってからである[3]。一九七〇年代には、国際交流基金による日本語教師の派遣が始まった。しかし、一九七五年、ポル・ポト政権によって、日本語教育のみならず、カンボジア全土の教育機関がすべて閉ざされてしまった。

ポル・ポト時代の終焉後、教育機関の復興が始まり、一九九四年、王立プノンペン大学においても、日本語教育が再開された。王立プノンペン大学外国語学部の元・日本語学科長ロイ・レスミー教授によると、当時、日本語教育はコース制で、学生数は四十四名であった。このコースを卒業した学生は、ロイ・レスミー教授を含めて、わずか三名しかいなかったとのことである。

二〇〇五年のJICA（Japan International Cooperation Agency 日本の国際協力機構）の報告では、カンボジアの日本語教育の歴史は、内戦をはさんで、①内戦前と②内戦後の二期に区分されている[4]。

①内戦以前の時期は、一九六〇年代に、日本政府派遣の専門家が王立プノンペン大学に日本語講座を開いた時期をさす。一九七四年には、内戦のために閉鎖されてしまった。

②内戦後の時期は、一九九三年にカンボジア政府の正式な承認を得て、霊友会が王立プノンペン大学の敷地内で、日本語教育活動を再開してからの時期をさす。霊友会とは、法華信仰に立ち、本尊を「南無妙法蓮華経」の曼荼羅とする宗教団体である。大正十二年（一九二三）、久保角太郎が若月チセ・戸次貞雄と共に創立し、大正十四年（一九二五）久保角太郎・小谷安吉・小谷喜美らで再発足した。

②内線後の一九九三年、日本語教育再開にあたって、①内戦前の資料はすべて失われており、日本語教師経験のある現地関係者も全くいなかった。そのため、カンボジアの日本語教育は、ゼロからのスタートとなった。

二〇一一年頃から、日本企業のカンボジア進出増加とともに、「日本語人材」が求められるようになった。そして、カンボジアと日本の友好関係が深まってきた現在、日本語ができるカンボジア人の需要が高まり、国内の日本語学習者は増加し、二〇一五年度の日本語教育機関の調査では、カンボジア国内の日本語学習者数は四〇〇九人と報告されている[5]。日本語学習者の増加とともに、日本語教育の必要性が高まっていることはいうまでもない。しかし、近隣国のタイやベトナムと比較すると、日本語教育の歴史の浅いカンボジアには残された課題も多い。

二、王立プノンペン大学外国語学部日本語学科の概要

王立プノンペン大学外国語学部日本語学科は、二〇〇五年十月に創設された。カンボジア国内初の日本語学科である。以来、四年制大学の日本語を主専攻とする学科として、カンボジアの日本語教師養成機関として、重要な役割を担ってきた。

現在、本学の外国語学部には七つの学科がある。日本語学科の学生数は、英語・国際関係学科に次いで三番目に多い。授業形態は、午前・午後・夜間の三部制をとっており、学生の年齢層はさまざまである。カンボジアは仏教国なので、仏教僧侶や既婚の学生もいる。

日本語学科創立当初は、学生数八十五名で、教授陣は三名であった[6]。専門の校舎も、教室も教材も不足していた。しかし、現在は学生数も増え、二〇一八年度から二〇一九年度の学科教員は十七名となっている。教員の内訳は、次のとおりである[7]。

常勤カンボジア人教師　九名

博士号取得者一名・修士号取得者四名・学士号取得者四名

日本人教師　六名

現地採用一名・国際交流基金派遣日本語専門家一名・客員講師一名

修士号取得者一名・学士号取得者二名

非常勤日本人教師　五名

修士号取得者一名、学士号取得者四名

二〇一八年八月までに、本学科を卒業した学生は五六八名である。また、二〇一八年現在の在籍学生数は六六七名で、内訳は次のとおりである。[8]

二〇一八年度学生総数六六七名（女：三八〇名、男：二八七名）

四年生一一〇名（女六十六名、男四十四名）、

三年生一一八名（女七十六名、男四十二名）

二年生一四七名（女九十八名、男四十九名）

一年生二四八名（女一二〇名、男一二八名）

学生総数は、二〇〇五年十月創立当時の八倍に増えた。日本語学科の志願者数は、依然として年々増加の傾向にあり、二〇一八年度には、一年生の学生定員・募集人数を大幅に増員した。

卒業時の学生の日本語能力はN4～N1であり、卒業後の進路希望は、①日系企業への就職、②日本への留学、③日本語教師である。[9]

本学科卒業生の七割弱が、卒業後、さまざまなかたちで日本へ行く。そのうち、四分の一が高度人材として日本企業に正社員として採用され、四分の一は大学院・専門学校へ進学する。また、技能実習生として日本へ行く学生もいる。[10] この傾向は、しばらく続くと推測されているが、新型コロナウイルス感染症の影響が懸念されるところである。

三、王立プノンペン大学日本語学科の科目概要

本学科の科目は、カンボジア人の日本語学習者の実態に合わせて構成されている。

（一）一般教養科目

本学科は、幅広い知識と教養を身に付けることを第一目標としている。[11] そのため、二年次以降は日本語を通して一般教養を学ぶが、一年次では本学他学部の教員による母語クメール語の授業で、さまざまな分野の学問を学ぶ。一年次に履修する母語による一般教養科目が、二年次以降の日本語で学ぶ授業内容の理解を助け、物の見方や考え方、問題を発見して自ら解決する能力や知識を習得することに役立っている。

王立プノンペン大学が必修と定める一般教養科目は、次の通りである。

「クメール文法」「クメールの歴史・地域」「地理・人口・経済学」「社会学」「英語1・2」「クメール文化・文明」「数学・統計学」「環境学」

（二）専門科目

日本語学科の学生が履修する日本語の専門科目と配当年次は次の通りである。

1年次：「日本語入門1～2」「基礎日本語1～2」「コンピューターと日本語1～2」

2～3年次：「漢字1～4」「文法1～4」「会話1～4」「作文1～4」

3年次：「日本事情1～2」「時事日本語1～2」「発表・討論1～2」「読解1～6」日

4年次：「日本文学1～2」「日本社会1～2」「通訳」「日本研究（卒業論文）1～2」

（三）専攻科目

四年次以降、学生は「日本語教育専攻」と「ビジネス日本語専攻」に分かれ、次の科目を履修する。

■日本語教育専攻

・「教育実習1・2」日本語教授法・教材、学習指導案の書き方を学び、模擬授業を行う。

・「教授法」日本語教育の教授活動の在り方や教授法を学習する。

・「翻訳」カンボジア語と日本語、双方の翻訳演習。

■ビジネス日本語専攻

・「ビジネス日本語1・2」日本語を使ったビジネスコミュニケーション能力を身につけ、日系企業でインターンシップを行い、日本のビジネス習慣を学ぶ。

本学科では、学生のニーズと実態に合わせて、上記の科目が各年次に配当されている。そのなかでも筆者が担当する「読解」には最も重点が置かれており、二年次～四年次まで履修する科目である。

四、王立プノンペン大学外国語学部日本語学科四年次授業の現況と課題

三年次における留学経験の有無によって、四年次学生の日本語レベルには非常に大きな差が生じる。

四年次には「日本語教育専攻」「ビジネス日本語専攻」に分かれるが、この専攻によって卒業時に修得できる学位の名称も異なる。どちらの専攻にも実習を伴う科目があり、日本語教育専攻は「日本語教育実習」、ビジネス日本語専攻は「ビジネス日本語」を履修する。

■日本語教育専攻

「日本研究（卒論）1・2」「時事日本語1・2」「読解5・6」「翻訳・通訳1・2」

「教授法1・2」「日本文学1・2」「日本社会1・2」「教育実習1・2」

■ビジネス日本語専攻

「日本研究（卒論）1・2」「時事日本語1・2」「読解5・6」「翻訳・通訳1・2」

「日本文学1・2」「日本社会1・2」「ビジネス日本語1・2」

いずれのコースとも、卒業論文は次の「日本研究（卒論）1・2」で指導を受ける。

（一）「日本研究（卒論）1・2」

四年になると、専攻に合わせてテーマを決め、卒業論文を書く。教員一人あたり、約二十五名程度の学生を指導するが、日本のようなゼミはない。週に二回授業があり、テキストには『大学大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』を使用している。

学習目標は、次のとおりである。

・卒業論文のテーマを決め、完成までの流れを理解し、専攻研究を読んでまとめることができる。

・研究・調査の仕方を理解すること。経過報告書を作成し、報告することができること。

・論文にふさわしい語彙や表現を使って、テーマに沿った論文を書けるようになること。

学習内容は、次のとおりである。

・卒業論文の研究テーマの設定、論文の構成、論文に使われる表現、論文の書き方。

・アンケートやインタービュー等の方法。論文作成に必要な研究・調査の仕方。

・卒業論文を完成させるための経過報告書の作成方法。

授業の進め方は、次のとおりである。

テキストの内容を読んでまとめ、テキストをもとにしてレポートの書き方を指導する。

グループで興味のあるテーマについて話し合う。

論文の先行研究を発表し合い、質疑応答と論文の進み具合を確認する。

卒業論文を書くにあたって、第一に問題となるのは、資料を読み取る学生の読解力である。先行研究や参考文献は、難易度の高い長文の日本語で書かれている。そのため、内容を理解するのが困難で、論旨を把握できないままに終わってしまうことがある。論文の書き方をなかなかつかめず、苦労する学生も多い。

第二に、担当教員の人数である。一人の教員が、少なくとも二〇名以上の学生の論文を指導しなければならない。そのため時間的余裕がなく、細やかな指導は難しい。

さらに、卒業論文以外に履修するのは、次の科目である。

(二)「時事日本語1・2」

資料を読んで、新しい語彙・漢字などを学習した上で、その記事をカンボジア語に翻訳する。前期・後期とも週に各一コマ。特に決まったテキストはなく、カンボジアで作成された日本語のホットペーパーや「日本語の新聞記事・日本語で書かれた報告書」などを資料として活用している。

(三)「読解5・6」

前期・後期とも週に各一コマ。使用テキストは、『The Great Japanese 30の物語一人物で学ぶ日本語－中上級』である。学習内容は、日本語能力試験N2の文法表現二五六単語・六五四語彙、テキストの作品の意味を解読し、異文化を理解することである。

学習の目標は、次のとおりである。

読解力を高めるとともに、日本語の専門的な文法事項（上級文法）を使った複雑な文章、日本語の特別な文章表現、日本語で書かれた説明文になれていく。

異文化理解を深めるとともに、学習者が自身について振り返ることができる。

この授業では、日本語のレベルが一段と高くなり、語彙も多く、文法も上級レベルで難しい。文章に書かれている内容自体はそうとう難しいものではない。しかし、先述のように、四年次では留学経験の有無によって、学生の日本語能力の差が大きく開く。そのため、「読解」の授業では、上級の文章指導だけでなく、教員の指導力が問われる。

(四)「翻訳・通訳1・2」

前期・後期とも週に各一コマ。テキストは特にない。学習内容は、通訳と翻訳の練習及び技術の修得である。学習の目標は、次のとおりである。

翻訳及び通訳する際に、内容に合わせた適切な表現や語彙を正しく使用できる。

社会に出たとき、仕事に生かせる力を身に付ける。

授業は、「翻訳」の場合、日本語のスピーチ・新聞記事・報告書をクメール語に、またクメール語で書かれた物語・新聞・スピーチを日本語に翻訳する。お互いに翻訳したものを発表しあいながら、より良い翻訳文となるように学生同士で修正していく。最後に教員がまとめる。

「通訳」の場合は、録音テープを聴きながら、クメール語は日本語に、日本語はクメール語に通訳し、同時通訳の練習を行う。

この授業は、翻訳に慣れていなかったり、語彙力の低い学生にとっては困難である。また、日本語の意味を理解したつもりでも、クメール語に翻訳できない語彙も多い。「通訳」の現場では、相手になかなか伝わらないこともある。

(五)「日本社会1・2」

週に一コマ。使用教材は、インターネット上の身近な日本語の新聞であり、学習の内容は、「新聞の内容把握、日本の社会の特徴を知ること」である。

学習の目標は、

新聞に書いてあることについて、意見を出すことができ、内容をつかむことができる。

書いてある内容を自分の言葉に言い換えることができる。

授業では、記事を読んだ後、教員が内容をカンボジアの出来事や事例をあげて比較しながら説明し、教室全体でディスカッションして、授業の最後に感想を書かせる。

この授業は、日本語の新聞を読んだり、意見を出し合ったりすることができ、学生にとって非常に役に立つ授業ともいえる。しかし、新聞記事によっては、日本語が難しすぎるため、学生の意欲を低下させてしまうこともある。したがって、学生の日本語能力に合わせて新聞記事を選ぶか、新聞記事の文章を学生の能力に合わせた表現に直す必要がある。

（六）「教授法１・２」

週に一コマ。テキストは、『日本語教育への扉』『日本語教授法を理解する本』『タスク日本語教授法』である。学習の内容は、次のとおりである。

日本語教育のあり方、効果的な日本語指導法を学習する。

日本語教育とは何か・なぜ日本語を学ぶのか―日本語教育の目的は何かを考えさせる。

学習の目標は、さまざまな指導法を身につけ、考える力を、現実を見つめる視点を、将来的にも自ら成長できる姿勢を養うことである。

授業では、グループで話し合いながらお互いに教え方を共有し、授業の時にやるべきこと、やってはいけないことなどをコメントしあう。

（七）「教育実習１・２」

週に二回。テキストは、『日本語教師の役割コースデザイン』。学習の内容は、日本語教師としての仕事の振り返り、ネイティブ、ノンネイティブのそれぞれの立場における教師としての役割、教師として理解しておくべきこと、学習者の特性、教師の特性、シラバス、教授法、教材教具などについてである。

学習目標は、次のとおりである。

シラバスを作成し、学校を開くとき、どのようにコースデザインをしたらよいか考えることができる。自分が担当する授業をうまく教えられるようになる。

授業では、教育実習で教える文法項目の教え方を指導し、学習指導案を書かせる。それに沿って、実際の授業展開を練習する。予行演習として、教室で模擬授業をし、最後に実践演習を行う。

この科目は、教員一人に対して学生の人数が多いため、十分な指導をすることが難しい。そのため、教えることに対して自信が持てない学生も少なくない。学生同士で指導力を高め合うような指導方法を工夫することが必要である。

（八）「ビジネス日本語１・２」

前期、週に二回。使用テキストは『しごとの日本語ビジネスマナー編』。学習内容は、次のとおりである。

挨拶の基本・身だしなみ・入室、退室・話し方や敬語の使い方・整理整頓・携帯電話のマナー、社会人らしい行動と言葉遣い・名刺、接客、訪問、会食、席次、電話対応・ビジネスEメール・指示を受ける・報告、連絡、相談、社内でのコミュニケーション・日本人の仕事観等。

学習の目標は、次のとおりである。

日本のビジネスに順応できるように、マナーを身につける。敬語、ビジネス用語が使えるようになる。卒業後日本の企業で順調に働くことができることである。

授業の進め方は、次のとおりである。

ビジネス用語を学習するために、テキストに書いてある会話を皆で読む。

会社にふさわしい身だしなみを教えるために絵や写真等を見せて説明する。

第二学期には、二週間の間で、二つの日本の会社を見学しなければならない。見学後、会社側から見学した学生の評価が担当教員に送られる。学生の側も、自分で見学した内容をレポートにまとめなければならない。

むすび

これら王立プノンペン大学外国語学部日本語学科の日本語の授業のなかで、筆者が担当するのは「読解」である。しかし、「読解」を苦手とする学生も多い。カンボジアには、本を読むという習慣が、そもそもないのである。日本語の長文には、未習の語彙・表現があふれている。語彙の意味を調べているうちに、学生たちの文章を読もうとする意欲が低下してしまう。たとえ、語彙の知識があったとしても、長い文章の意味を理解し、全体を把握するのは困難である。長文読解には、かなりの努力と時間を要する。「読解」の授業をどのように構成し指導すれば、学生たちの意欲を低下させずに、読解能力を高めていくことができるのか。これが国費留学生として、筆者に課

せられた課題である。

そこで、日本の中学校の国語教育・文学研究の方法に学んで、今後の「読解」「日本文学」の授業の指導方法を検討するとともに、当該授業で使用する教材を開発することとした。それが、日本人院生・学部生の協力をえて、カンボジア人国費留学生が取り組んでいる「原文によるレベル別宮沢賢治多読ライブラリー」プロジェクトである。本稿では、その序としてカンボジアの日本語教育の現況と課題を整理して、その意義を示した。カンボジアに初めて「日本文学」が紹介されたのは、一九九〇年代である。東日本震災のとき、日本の復興を祈って、王立プノンペン大学日本語学科では、宮澤賢治の「雨ニモ負ケズ」を読んだ。今後、カンボジアに宮澤賢治の作品を紹介し、原文に近い本文テキストと効果的な注釈を付したクメール語の翻訳教材の開発に取り組んでいきたい。

注

（1）日本外務省https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01asia/info/C10300.html（二〇二〇年四月二〇日）。

（2）同右。

（3）ロイ・レスミー「王立プノンペン大学の日本語教育事情について」（『アジアの友』第五三四号、二〇一八年九月二〇日、公益財団法人アジア学生文化協会）。

（4）大塚正明著者「JICA の日本語教育協力の事例報告―ラオス・カンボジア・ベトナム―」（二〇〇五年九月、国際協力機構青年海外協力事務局）。

（5）国際交流基金「二〇一五年度日本語教育機関調査結果」pf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/cambodia.html#KEKKA（二〇二〇年二月十日）。

（6）SankeiBiz（サンケイ・ビズ）https://www.sankeibiz.jp/macro/news/190225/mcb1902250500003-n1.htm（二〇二二年五月十日）。

（7）『王立プノンペン大学日本語学科案内と規則』（二〇一八年十一月改訂版、王立プノンペン大学日本語学科）。

（8）『日本語学科の総合レポート』（二〇一八年）。

（9）国際交流基金によるhttps://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/cambodia.html（二〇二〇年一月二〇日）。

（10）注（6）の前掲書。

（11）注（7）の前掲書。

［附記］本稿を成すにあたって、藏中しのぶ先生、佐竹保子先生、安保博史先生、吉田慶子先生、三田明弘先生、杉山若菜先生、笹生美貴子先生から貴重な御指導をたまわりました。ここに記して、深く御礼申し上げます。